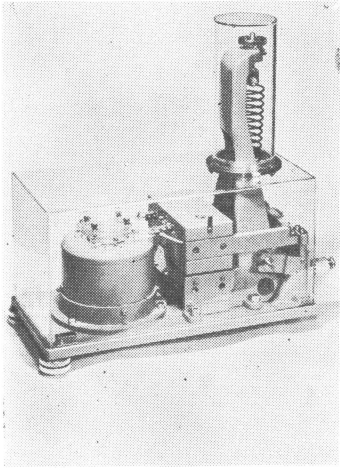


地方だより

気象庁観測部地震課



動コイル型変換器(上下動)

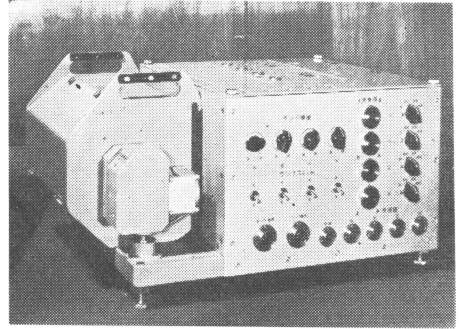
地震といえは「^{なまず}鯰」といふ何となくけったいな結びつきである。地下の大ナマズが尾ひれを動かして地震がおこる。これを静めて再びあばれないように鹿島の明神が要石でこれを刺している。これが地震と鯰のむすぶつきのようである。

明治8年赤坂葵町(現大倉邸)にバルミエリー式感震儀を設置して東京における地震観測は開始された。これが地震課の前身である。明治15年皇居内日本丸に移転し、関東地震前に現在の地震計室が完成し、今日に至っている。80余年間の地において観測が続けられた東京の地震観測も近く皇居東地区の公園地区として宮内庁に返還しなければならない運命にある。

総勢23名、東京の地震観測、全国の地震観測器械の整備、地震観測結果の調査統計、地震日報の発刊、外国との資料交換、研究成果の編集発刊、火山観測の整備、火山観測資料の整備調査、地震工学に関する仕事、地震火山に関する照会回答等仕事の面では仲々多彩である。しかも、津波予報という地震による唯一の災害防止の予報業務を昼夜の別なく担当している。

「今日は地震が多いように思うが近く大地震があるのではないか」、「人相見の顔に異変(地震)があるという相が出たので注意しておきます」「北海道支笏湖の湖面が異常に振動している。去る昭和27年3月の十勝沖地震の前にもこのような現象があったので、また地震があるのではないか」「浅間山に登山したいが今登っても大丈夫ですか」と一般に地震の照会には、地震予報に関することが多い。現在の地震学者の動きも地震予報はできないものかと熱心であるが、しかし今のところ困難な問題となっている。

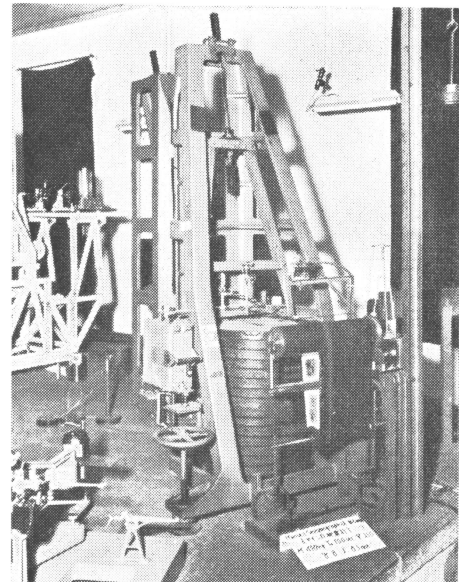
地震学の分野で地震課の受持ちは、気象庁の観測組織を活用して地震観測を行ない、その結果を日本における地震活動状況、地震予知への基礎資料の提供利用の分担



フィルム記録装置

である。大正の末期かう昭和の初め関東大地震を契機として整備された地震測器も、最近の電子工学の進歩によって遂次その観測精度に疑問が生じている。これを解決すべく気象庁における地震観測網も電磁式地震計の観測網に変更しつつある。この整備が1日でも早く、そして地震学の発展特に地震予知へ役立つことを願っている。

「若し東京に一寸した大地震があれば、先ず地震課事務室が一番に倒潰するのであらう」とは或る新聞記者の話でしたが、課員も皆そう思っている。その時は………だが幸いにも数年後に気象庁も庁舎が完成するので、それまでつぶれないこと(大地震のないこと)を願っている。(野口憲男記)



地震計室の一部